ベルリンの歴史を体験した数日間
－AKBPフォーラム2016に参加して－

多喜 萌

AKBPフォーラム初日、幸運にも雨の予報が外れ快晴のなか、最初のプログラムであるベルリン市内見学のため、私たち参加者は観光バスに乗り込みました。はじめに、ベルリン中心部エーベルト通りの近くにあるドイツ連邦議会議事堂を訪れました。議事堂に入る際、空港でのようなセキュリティーチェックを受けて、エレベーターで、巨大ガラス張りのドームが特徴的な屋上に上がりました。このドームは、「開放的で透明性のある議会」を象徴しているそうです。議事堂の前の共和国広場では、サッカーをして遊ぶ子供たちや、植え込み間をセグウェイで蛇行している若者たち、散歩しているカップルなどの姿が見られ、このドイツの政治的中心地区が、ベルリン市民にとっては、開放的で身近な場所であるという印象を受けました。

その後、議事堂の近くにあるブランデンブルク門を訪れました。ベルリン滞在中に親しくなったフランスのランスのジャン・ジョレス高等学校の３人（マキシーム・ドーフィン、ゾエ・ゼルジェ、ショーラ・ルグダ）と一緒に写真を撮りました。さらにエーベルト通りに沿って南に数分行くと、ホロコースト慰霊碑がありました。そこには、約２万平方メートルもある広い敷地に大小様々な無機質なコンクリートの石碑が並んでいました。私はその光景に、この慰霊碑を写真や映像で見たときとは比較にならないほどの、強い印象を受けました。コンクリートの石碑は大きいもので４メートル近くあり、目の前に立つと圧迫感と息苦しさを感じました。また、私はここで、歴史の授業や本や映画で見たナチスの大量虐殺に関する写真や映像が現実に起こった事実として迫ってくる感覚に襲われ、「歴史に触れる」体感をしました。

その後、私たちはバスでベルナウアー通りにある東西ベルリンを隔てていた壁が残されている場所へと向かいました。ここには、1961年から1989年までベルリンを東西に隔てていた壁の一部が、周囲の無人地帯、監視塔や街灯と共に当時そのままの状態で保存されていました。劣化して色あせた監視塔の外壁や破損した窓に、この監視塔が健在であった当時のベルリンの姿を想像することができました。

他にも、バスで移動中に、ティーアガルテンにある対仏戦勝記念塔やソ連軍戦勝記念碑を目にし、それらの建物や記念碑にまつわる興味深いエピソードを聞き、ベルリンの歴史に興味を持ちました。日本に帰国したら、ドイツ統一前後のベルリンの混乱を描いた『グッバイ、レーニン!』(ヴォルフガング・ベッカー監督、2003年)や、第二次世界大戦中のホロコーストを描いた『シンドラーのリスト』(スティーヴン・スピルバーグ監督、1993年)を見直したいと思いました。

このフォーラムには、400名にも及ぶPASCH関係者が参加しており、特に親しくなったランスのPASCH校生たちをはじめ、たくさんの人たちと話すことができました。ランスの生

徒たちから、フランスでは、スタジオジブリ制作の『となりのトトロ』、『千と千尋の神隠し』、『もののけ姫』、諫山創による日本の漫画『進撃の巨人』(ドイツ町が舞台のモデルとなっている)が流行していることを聞きました。彼らは、日本のアニメ、日本語、日本の食べ物に興味を持ってくれていて、それがとても嬉しかったです。また、ドイツ語でたくさんの人話し、自分の発音の悪さを痛感し、更にドイツ語学習に励む決意をしました。

ベルリンでは、毎日とても楽しい日々を過ごすことができました。このフォーラム開催に当たり準備に関わって下さった多くの方々、特にゲーテ・インスティトゥートの方々と、現地でソーシャルメディアチームを直接指導して下さったヘレーネ・タンゲルさん、イェンス・ヘルマン氏にお礼を申し上げます。また、ベルリン市内の美味しいカレーソーセージや白ソーセージを食べることのできる店、ソニーセンター、イーストサイドギャラリーなど案内して下さった引率者の木更津高専の柴田先生にお礼を申し上げます。